公益財団法人 http://www.jkcf.or.jp

日韓文化交流基金NEWS

「虹の架け橋」（作者・書道家　濱﨑道子）

No.84　2017.12.26

Contents

1-2　日韓交流おまつり2017
- 日韓交流おまつり（東京、ソウル）開催
- 両会場のレポート

3　基金賞・代表訪韓団
- 第18回日韓文化交流基金賞受賞者紹介
- 基金役員代表訪韓団が韓国訪問

4-5　基金講演会
- 北朝鮮人民の生活－脱北者の手記から読み解く実相－
  東京大学名誉教授　伊藤亞人

6　助成事業紹介
- 第2回音楽で手をつなごう日韓交流コンサート
  ～障がいのある仲間とともに～

7　公募事業
- 日韓新時代支援プログラム採用案件一覧、2018年度助成事業について

8-9　青少年交流事業
- この夏、日韓の学生は「思いやり」を実践し、世界に通用する「おもてなし」とは何かを学びました

10-11　日韓文化交流基金事業報告
- 2017年度第2四半期実施事業紹介

12　青少年交流事業フォローアップ
- 訪日団OB・OGインタビュー
  「東日本大震災被災地について今も思うこと」
  金庚玟さん（2012年度訪日団参加者）

「日韓交流おまつり2017」が東京、ソウルで開催

「共に歩もう 心ひとつに」をテーマに「日韓交流おまつり2017」が9月23日、24日東京・日比谷公園、9月24日ソウル・COEXにおいて開催されました。

「日韓交流おまつり」は、2005年の日韓国交正常化40周年を契機として発足、毎年ソウルで開催されてきました。2009年以降は東京においても開催されるようになり、日本と韓国で開かれる最大の交流イベントです。

主催者発表によると、今年度の「おまつり in Tokyo」、「おまつり in Seoul」には各会場とも6万名を超えるたくさんの方々が来場し、互いの国についての理解を深めました。

まずは、東京・日比谷公園で開催された「日韓交流おまつり in Tokyo」に出展した当基金のブースの様子についてご紹介いたします。

当基金のブースでは、在外公館選抜韓国青年訪日団5団の16名の学生らが中心となり、高句麗古代装束試着体験や高麗郡歴史パネルの展示、書道のワークショップを行いました。書道のワークショップでは、初日にメインステージで大筆パフォーマンスを披露いただいた濱﨑道子先生を迎え、来場者の皆さんと共に大きな紙に自由に日韓友情のメッセージを筆で書き込みながら、作品を完成させました。高句麗古代装束の試着体験は3年連続の実施となりましたが、3年目にして初の1000名超えを記録し、当基金ブースでは過去最多の約3000名の方々との交流が行われました。

書道家 濱﨑道子先生による作品制作の様子

公益財団法人 日韓文化交流基金
〒101-0061　東京都千代田区三崎町2丁目21-2 ユニゾ水道橋ビル5F
tel. 03-6261-6790 / fax. 03-6261-6780

日韓交流おまつり2017

中でも、高句麗壁画に描かれた衣装を再現した高句麗古代装束試着体験では、テレビのニュースでも紹介されていたため、「テレビで見た衣装これだよね」と語りながら、中には小さな子どもを含めた家族全員で試着する様子も見られました。また、韓国からの来場者にとっても大変珍しい衣裳なので試着した韓国人も多く、文字通り、日韓双方の老若男女が楽しみながら交流しました。

2日間にわたって当基金ブースの運営を手伝ってくれた16名の韓国の学生らは、「こんなにも韓国が好きな日本人と交流できて幸せだ、かなり疲れたが貴重な体験ができて嬉しい」と語っていました。

さらに、「日韓交流おまつり in Tokyo」には、当基金が企画準備した外務省招聘（韓国外交部派遣）韓国大学生訪日団の学生30名も2日にわたって駐日韓国大使館 韓国文化院のブースを中心に積極的に活動し、交流しました。

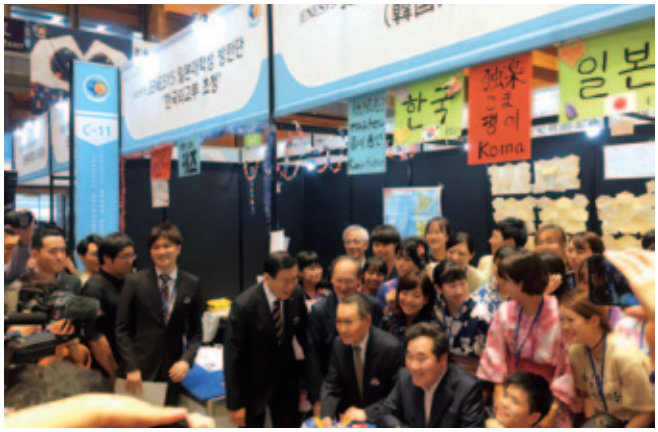
高句麗古代装束を着用し、記念写真を撮る来場者

相互交流として行われている日本大学生訪韓団（韓国外交部招聘）は、9月24日（日）にソウルにて開催された「日韓交流おまつり in Seoul」に参加し、会場内のブースにおいて、日本各地の文化をクイズ形式で紹介したり、折り紙や紙風船遊びなどの日本の伝統文化を紹介したりするなどして日本を発信し、現地の方々とも交流を深めるなど、数あるブースの中でも行列ができるほどの人気ぶりでした。

また当日は、韓国の李洛淵（イ・ナギョン）国務総理が日本大学生訪韓団のブースを訪問され、大学生と一緒に折り鶴を折る姿などがメディアにも取り上げられました。突然の訪問で大学生たちも驚いていましたが、一人ひとりにとって、思い出に残るとても良い経験となったようです。

なお韓国の国務総理が日韓交流おまつりに参加したのは、2005年の事業スタート以来、初めての事であり、同首相が記者団に対し「日本と韓国の長い交流の歴史に感謝しながら、今後もより深い交流が続くようにお互い努力していきたい」と述べていました。

李洛淵（イ・ナギョン）国務総理に日本の折り紙（折り鶴）を紹介している様子



李洛淵（イ・ナギョン）国務総理、長嶺駐韓日本国大使と共に記念撮影

国務総理訪問時の感想
和歌山大学1年
姜愛美（かん・えみ）さん

韓国の国内政治を担っている李洛淵（イ・ナギョン）国務総理の目の前で、日本の伝統文化である折り紙の「折り鶴」について直接説明できたという事は、私にとってまたとない経験であり、光栄なことでした。

また、たくさんのブースがあった中で、私たち日本大学生のブースを訪れてくださったことで、次世代における日韓関係改善の希望を見い出すことができたように思います。

今回、日韓交流おまつりに参加して得た様々なものを、たくさんの人に発信することで社会に還元していきたいです。

基金賞

第18回日韓文化交流基金賞 決定

学術・文化分野の交流を通じて日韓両国間の友好親善に寄与した韓国人・団体を表彰する日韓文化交流基金賞の第18回目となる贈呈式が9月19日にソウルで行われました。今回の受賞者は東亜日報社顧問の沈揆先（シム・ギュソン）氏、KBSラジオ国際放送（KBS World Radio）日本語放送プロデューサー兼アナウンサーの金恵英（キム・ヘヨン）氏の個人2名と、釜山国際写真交流協会の1団体です。

今回の基金賞の受賞者の皆さんと長嶺大使、鮫島会長、小野理事長。前列右から、釜山国際写真交流協会の金永白（キム・ヨンベク）会長、金恵英（キム・ヘヨン）さん、沈揆先（シム・ギュソン）さん、後列は釜山国際写真交流協会のメンバー。

沈揆先（シム・ギュソン）氏

東亜日報東京特派員・支局長を歴任され、以後、論説委員時代には、日韓関係に関する多くのコラムを執筆。日本の立場を十分に理解しつつ、互いが相手の立場を尊重することによる問題解決を訴えてこられました。2016年からは「和解・癒し財団」の理事を務めた他、「日韓交流おまつり」実行委員、日韓フォーラム運営委員等、多数の日韓関連団体への参加を通じ、両国関係発展のために貢献されています。

金恵英（キム・ヘヨン）氏

KBS（韓国放送公社）の国際放送で30年にわたり日本語放送を担当。日本に対するバランスのとれた理解と認識をもとに番組制作にあたり、日本のリスナーの韓国理解を深めるとともに、リスナーとの交流行事等を通じて、韓国における日本理解にも貢献されました。2002年から担当している『金曜座談会』は、日韓双方のジャーナリストが時事問題をテーマに定期的に意見を交換するもので、両国メディアの視点の違いを通じて、真の理解を目指す場としても高く評価されています。

釜山国際写真交流協会

1998年に長崎県対馬支庁主催の日韓交流写真展に参加したことをきっかけに、以後釜山と対馬で交互に写真展を開催。あわせて大規模な交流団の相互訪問を実施し、写真を通じた日韓間の理解にも貢献されてきました。2013年からは、米国、中国の団体を加えて交流の規模を拡大し、大きな枠組みの中で日韓の友好に大きく寄与されてきました。

代表訪韓団

第33回日韓文化交流基金代表訪韓団を実施

9月18日から21日の4日間の日程で、当基金鮫島会長をはじめ、理事、評議員で構成される代表訪韓団一行が韓国を訪問しました。

代表訪韓団の日程紹介

▶9月18日

・ソウル到着
・韓国外交部趙顯（チョ・ヒョン）第2次官を表敬訪問

趙顯第2次官（写真右側）と未来志向の日韓関係について懇談。

・長嶺安政駐韓国日本大使を表敬訪問
・李洪九（イ・ホング）韓日文化交流基金会長主催歓迎晩餐会

▶9月19日

・ソウルジャパンクラブ役員との朝食懇談会
・韓国国立国際教育院宋基東（ソン・ギドン）院長表敬訪問及び宋院長主催昼食懇談会
・第18回日韓文化交流基金賞贈呈式鮫島会長主催レセプション「Hand in hand to the future－新たな50年に向けて」

▶9月20日

・大邱市へ移動
・達城韓日友好館・鹿洞書院訪問及び大邱市達城郡関係者、沙也可関係者との昼食懇談会

16世紀に日本から渡った沙也可が住んでいた場所として、日韓両国にゆかりのある、大邱市達城郡にある達城韓日友好館・鹿洞書院を訪れ、自治体関係者や平成28年度外務大臣表彰受賞者の金相保（キム・サンボ）氏らから歓迎を受けた。

・大邱・慶尚北道地域在住の訪日フェロー経験者との夕食懇談会

大邱・慶尚北道地域の訪日フェロー経験者を招いての夕食会では、訪日研究後の活動の様子や、最近の日本研究の動向などについて話をうかがった。

▶9月21日

・釜山市へ移動
・釜山近代歴史館見学
・釜山韓日文化交流協会役員、釜山地域の日韓交流関係者との昼食懇談会
・釜山より帰国

参加者名簿　鮫島章男（日韓文化交流基金会長、太平洋セメント㈱名誉顧問）、小野正昭（日韓文化交流基金理事長、海外邦人安全協会会長）、戸塚進也（日韓文化交流基金理事、元衆議院議員、元掛川市長）、楢崎正博（日韓文化交流基金理事、元関電産業㈱取締役）、大竹洋子（日韓文化交流基金評議員、元東京国際女性映画祭ディレクター）、伊藤亞人（日韓文化交流基金、東京大学名誉教授）、佐藤俊行（日韓文化交流基金評議員、国際公共放送（PBI）事務総長）

北朝鮮人民の生活ー脱北者の手記から読み解く実相

東京大学名誉教授　伊藤 亞人

今年度第2回目として、10月25日に開催された基金講演会「北朝鮮人民の生活ー脱北者の手記から読み解く実相」（講師：伊藤亞人さん）の内容をご紹介します。

北朝鮮をめぐってマスコミが連日のように取り上げ、危機感がかきたてられている。しかし今こそ北朝鮮問題とは一体いかなる問題なのか冷静に問う姿勢が求められる。誰にとって、どのような脈絡と関連において、短期的あるいは長期的に、そして現実的な展望も視野にいれて問題の全体像を念頭におく必要がある。はたしてこの問題に対する日本における認識と関心はどうであろうか？　両国間の交流と情報の欠如、イメージと不安ばかりが先行する状況こそ問題であろう。東アジアにおける位置づけ、国家の枠組みを越えた人道的視点も含めて、日本の立ち位置と展望をさぐる努力を怠ってはならない。

北朝鮮社会の状況について、人間社会の一つの姿として総体的（holistic）にとらえ、動態的で実践志向的な洞察と理解が求められており、この点で人類学的視点による地域社会と生活者に焦点をおいた研究が生かされよう。北朝鮮社会の現状も、半島北部の生活基盤と地政的条件のもとに、外部からの政治的介入と影響を通して歴史的に形成されてきたものである。地政的な特性、植民地介入の遺産でもある鉱工業や電力・化学工業の優位性、ソ連・中国の勢力を背景にした社会主義化と南北の戦乱と休戦下の軍事体制、ソ連の体制崩壊にともなう経済破綻など、世界史的で大陸規模の課題が凝縮されている。

集めた手記をもとにお話しされる伊藤亞人さん

社会主義社会が踏む過程とは、その制度が機能した初期状況から、やがて機能不全をきたして逆機能ともいえる閉塞状況に陥り、その結果、改革開放か体制移行に迫られるか、あるいは崩壊に至る過程に至るようだ。北朝鮮も社会主義化の過程で、理念の先行、ソ連モデルの制度導入、党・政府の正統性と指導性、思想行動・情報・教育の統制など、同様の過程を踏んできたといえる。社会像を革命の遂行と闘争の過程と位置づけ、社会主義建設のための全体主義が強調されてきた。公式制度の人為的導入と既存の社会文化伝統の否定、過去との断絶、社会と人生の再定義なども明瞭である。住民生活に対する規制も、時間・空間、経験・知識・情報など全般に及び、社会体制の維持・再生産のため、日常の組織生活と政治学習を通して、党に対する忠誠と集団主義による課題遂行のため人民が動員され、“総和”（総活）によって点検がなされてきた。

こうした社会の実態を把握する上で、公式制度と情報に拠る制度論的アプローチ・国家アプローチが何より有効であるが、その限界も弁えなければならない。社会主義社会における非社会主義的側面つまりは非公式領域をどのように読み取り位置づけるかが課題となる。社会主義化にともなう構造的なディレンマを内包した社会の“実態”にどのように迫ることが可能であろうか。その実態が明らかにされない状況のもとでは、この体制から離脱してきた脱北者の生活経験と彼らがもたらす情報は大変貴重である。社会の圧倒的多数である人民の主体に鑑みるなら、インタビュー調査の限界を踏まえるためにも、彼らの生活者としての主体的な参与が欠かせない。そこで筆者は、本人たちに自身の生活経験をできるだけ具体的に書き記すことを勧め、テーマや書き方や内容をできるだけ本人の主体性に委ねることにし、余裕を持って協力できるように3年間に亘って、その間にほぼ毎月面談できるような態勢で臨んだ。主として対象としたのは、自分の生活をふり返って書き記すことができる時間と精神的な余裕のある年長世代とし、具体的な生活記録を残すことの意義を自覚してもらい、その手引きとして私自身が1972年当時に韓国農村で観察記述したものを示した。そうして得た手記は450篇に及んでいる。

北朝鮮社会主義の公式制度として、朝鮮労働党の党員と幹部の地位と権限、党による指導体制として組織生活における集団主義の実際、政治学習、職場団体（社労青、職盟、女盟、農勤盟、人民班）、総和の実際、人民の成分と資格、管理統制機関（保衛部、安全部）、所有と経営の制度、労働配定、職業の世襲、計画経済の体制、供給と配給体制、課題の遂行、動員などについて、実際の様子が伝わってくる。

一方、公式制度の機能不全にともなう非公式領域の拡

大、自力更生の拡大と現状、供給体制の不全・破綻による動力不足（電力、原油）および生産資材の不足による地方軽工業の稼動低下の結果、生活物資や農業物資（肥料、農薬、営農資材）が枯渇する中で、収買制度による資材原料の補填（廃棄物資、中古品、家畜、採取物、家庭の手工芸品の買い取り）に加えて、様々な自力更生（自体解決）の実相が記されている。

講演では庶民の生活から北朝鮮の社会システムの実態など多岐にわたってお話しくださいました。

自力更生としては、企業所・工場による原料基地の拡大、副業地、副業船、副業班、8.3消費品の製造、さらには意欲的な個人による請負事業や、額上計画とよばれる職場外経済活動の容認などの実態が示されている。さらには、不法耕作（菜園の拡大、山間での小土地開墾）、家庭婦人による家内班、市場（チャンマダン）における商い・物々交換・行商（中古品、廃品、手工芸品、食物、家内畜産、流出品・盗品）、さらに協同や雇用による自営業の発展（食堂、食品加工、運輸、旅館、貿易、倉庫業、家内工業、サーヴィス業、漁業、炭鉱、高利貸し、流通・卸業、工場製品・闇物資の売買）、あるいは、相互扶助慣行（タノモシ、モアモックム、契トン）の実態が見えてくる。とりわけ、市場における女性たちの私的商活動、配給物資や工業製品の取引の発展と公然化、当局による統制の試み、さまざまなブローカー（トンジュ、ムルチュ、テコクンなど）や仲買、卸業、請負、高利貸し、口利き、さらには公的な貿易による外貨事業との連携などの実態は、目覚ましいものがある。それと同時に様々な盗みの蔓延（農作物、食物、家庭の家畜、工場の物資、付属品…）、賄賂や贈物による公式の地位・権限との連携、物資の流用・横領などの実態も伝えられている。

これら生活者の手記を通して浮き彫りとなるのは、社会主義の原則に沿って公式制度が厳しく指導・管理されている一方で、住民が生活の防衛策として切り拓いてきた非公式領域である闇の行動領域の実態であり、反社会主義・反党・反革命的として糾弾されていたものが、やむを得ない事情として黙認・容認され、やがて半ば公然化するに至った状況である。社会主義の制度が機能不全に陥り、もっとも基本的な食料の配給まで滞った危機的な状況では、党の指導による総和も形骸化し、人々は生き抜くため果敢に行動してきた。

社会主義の原則による公式の社会制度は、それに反する非公式な関係や手段によって支えられ、両者は不可分な一体をなしているとみてよい。計画経済の体系は実質的に破綻し、あらゆる物資が非公式に生産され、市場に出回り、あるいは交換されることで、新たな物資供給状況が生まれていると見てよい。政府はたびたび対症的な規制緩和に迫られてきたが、社会主義の体制と秩序を維持する原則を崩さず、社会主義から移行すべき新たな体制について明確な展望を提示できないまま、新たな状況を追認することで問題の緩和に追われてきたといえる。一方で人々は、的確な状況判断によって公式と非公式を弁えた行動が求められ、未知の領域で可能性を探りながら、経験を積んで変身を遂げ、新たな生活力を身に付けている。公式と非公式が一体化して、社会全体がいわば運命共同体的ともいえる体制に精緻化が進んでおり、その内旋（involution）ともいうべき状況が国際的な孤立のもとでどこまで持続可能か注目されよう。北朝鮮社会の今後を理解する上で、圧倒的多数を占める人民の生活実態を踏まえることが先決であり、真摯な取り組みが求められている。

詳しくは、拙著『北朝鮮人民の生活－脱北者の手記から読み解く実相－』（2017年、弘文堂）を参照されたい。

講演会には学生たちの姿も見られ、学生からの質問にも答えてくださいました。

PROFILE

伊藤 亞人（いとう・あびと）

1943年生まれ。東京大学教養学部卒業後、同大学大学院社会学研究科修士。東京大学助手、助教授、教授を歴任、その後琉球大学や早稲田大学でも教授を務め、現在は東京大学名誉教授。特に韓国の農村を中心に社会組織、契、宗教・信仰と儀礼、儒教と教育、歴史観、物質文化、移動と都市化、祝祭と地域振興などに関する現地調査を行う。現在は主として北朝鮮社会における民衆の生活実態について調査研究に取り組む。著書には、『北朝鮮人民の生活－脱北者の手記から読み解く実相』（2017年、弘文堂）、『珍島－韓国農村社会の民族誌』（2013年、弘文堂）など。

助成事業紹介

第2回 音楽で手をつなごう日韓交流コンサート
～障がいのある仲間とともに～

音楽で手をつなごうプロジェクト
日韓コンサート実行委員会　代表　**小林 紳一**

● 音楽で手をつなごうプロジェクトについて

音楽を仕事とする私たち夫婦は、ダウン症候群のある息子（現在6歳）が生まれたことをきっかけに、「音楽で手をつなごうプロジェクト」を立ち上げました。息子が生まれた当時を振り返ると、我が子を初めて授かった喜びと、息子の持つ障がいへの不安とが入り交じり、日々の子育てに追われながらも、なかなか気持ちの整理がつかなかったことを思い出します。

そんな中で私たちに前を向かせてくれたのが音楽でした。障がいのある人のもつ素晴らしい音楽性を通して、多くの聴衆に障がいをより身近なものとして感じてもらうことを目的として立ち上げたこのプロジェクトで、2015年、日韓国交正常化50周年の年に日本と韓国で「音楽で手をつなごうコンサート～障がいのある仲間とともに～」を開催しました。3月には東京で、9月には韓国のソウル（日本大使館公報文化院ニューセンチュリーホール）と大邱市友鹿洞（韓日友好館）で日本メンバーが訪韓し、現地の障がいのある演奏者と交流コンサートを行いました。

● 祖父から母へ、母から私たちへ

私たちが初めて友鹿洞を訪れたのは、祖父と母に同行した2005年のことでした。祖父（中西光夫・愛知県新城市·昨年逝去）と母（小田章恵・愛知県岡崎市）は、大邱市友鹿洞の沙也可を通じた日韓市民交流活動に20～30年もの間尽力してきた歴史があります。教育者だった祖父は、1974年から続く友鹿洞との交流の中で、沙也可の十四世金在徳（キム・ジェドク）氏を日本へ招いて講演会を実施し、また1986年からは新城市と大邱市の中学生交流を開始するなど、地道に交流を続けてきました。高齢の祖父に代わり、母は勤務する愛知県岡崎聾学校と大邱聾学校とを姉妹提携させ、沙也可韓日国際シンポジウムでは日本側代表で発表するなど、祖父の後を受け継ぎました。行く先々から温かい歓迎を受けている2人を目の当たりにし、祖父と母が取り組んできた活動が大変価値のある事だと知りました。

大邱コンサートハウスでの日本メンバーの演奏

● 私たちにとっての日韓交流、そして友鹿洞

日韓交流の原点とも言える地であろうこの友鹿洞で、私たちの主催する初の日韓交流コンサート（2015）を開催したいという希望は、祖父の長年の情熱、それを受け継いだ母の想いを私たちも大切に受け継ぎたいという強い想いからでした。そして、私たちはその想いを「音楽にのせて表現していきたい」と考えました。また、ここまで強い想いにさせられた理由のもう一つは、友鹿洞の美しい風景と、温かく迎えてくれる人々が忘れられなかったからです。

● 第2回 音楽で手をつなごう日韓交流コンサート

2年ぶりとなる今年、私たちは9月24日～28日に日本から障がいのある演奏者6名、その家族、関係者の総勢15名で再び韓国を訪れ、日韓交流コンサートを開催しました。今回は韓国側からの出演者や来場される方々においても、より多くの皆さまに参加していただくコンサートになればという願いから、開催場所は大邱市中心部としました。25日は小中高合わせ約300人程の障がいのある生徒さんが学ぶ大邱聖保学校での公演。日本メンバーは和太鼓や北海道民謡「ソーラン節」などの演奏をし、素晴らしいハーモニカの音色を奏でてくれた大邱聖保学校の生徒さん達で編成されるマルグンソリハーモニカ演奏団との共演も実現しました。26日は大邱コンサートハウス（チェンバーホール）での一般公演。日本メンバーに加え現地からは、障がいのある人たちが中心となる弦楽合奏団、合唱団、ハーモニカ演奏団、オーケストラが参加し、総勢100名程の出演者で賑やかなコンサートとなりました。

コンサートの最後に出演者と会場の皆さんが一体となって歌った“故郷の春”は、国を越え、障がいを越えて想いを一つに出来る「音楽の力」をより一層強く感じさせるものとなり、今後更に日韓両国で“手をつなぐ輪”を大きくしていくための原動力となりました。

コンサート終演後、日本のメンバーとその関係者で

PROFILE

小林 紳一（こばやし・しんいち）

1969年生まれ。千葉県出身。国立音楽大学器楽学科卒業。卒業後、25年にわたり音楽教育に携わっている。2014年より音楽で手をつなごうプロジェクトを主宰し、韓国、東京、千葉などで演奏活動を行う。

2017年度「日韓新時代支援プログラム：Hand in hand to the future ～新たな50年に向けて日韓共通の課題に取り組む～」採用案件一覧

本プログラムでは、「政治、経済、社会等の様々な分野において日韓両国が直面する共通課題に、両国の青少年、中高年層、研究者、ジャーナリスト等、多様な主体が共同で取り組む」ことを目標とし実施するもので、今回、下記の通り3団体と4名の個人を対象に支援することが決定しました。

事業名	申請団体	実施期間	場所
NPO法人 汎太平洋フォーラム：持続可能な少子高齢化社会提言プロジェクト	特定非営利活動法人 汎太平洋フォーラム	2018/1/24 ～ 3/16	神戸大学、金沢大学、韓国（ソウル）
高齢化社会における高齢者の生きがい創造セミナー	パラソルギャラリー実行委員会	2017/12/9 ～ 12/16	韓国（光州、大邱）
日韓ユース・カンファレンス	公益財団法人 日本YWCA	2018/2/23 ～ 2/26	大阪市立青少年センター

氏名	所属機関	職位	研究テーマ	受入機関
金暎根	高麗大学校グローバル日本研究院	副教授	日本の震災復興学と現場力：日韓協力のための新たなアジェンダ～安全共同体	関西大学社会安全学部社会安全研究科
李容圭	済州大学校工科大学建築学部	副教授	少子高齢化社会に対応する沖縄と済州の公共住宅の計画論的な特徴	琉球大学工学部工学科建築学コース
崔慶嬉	漢陽大学校現代韓国研究所	研究委員	北朝鮮の核・ミサイル問題に対する日韓の共同対応	東京国際大学
湯山篤	ソウル大学校社会科学大学院社会福祉学科	研究生	日本と韓国の貧困政策の発展過程研究：1960年代から現在までの歴史的検証	ソウル大学校社会科学大学院社会福祉学科

公募プログラム　2018年度助成事業のご案内

人物交流助成

人物交流助成は日韓共同で開催する草の根交流、シンポジウム・国際会議、芸術交流の各種事業を支援し、日韓の交流をより活性化・多様化させ、両国の友好・交流関係を深めることを目的としています。

対象分野・募集期間

草の根交流
一般市民による日韓の相互理解のためのプログラム。

シンポジウム・国際会議
日韓両国の文化や日韓関係など両国にかかわるテーマを扱うシンポジウム・国際会議

芸術交流
専門家による公演・展示・共同制作など、芸術分野における交流を目的とする各種の文化事業。
2018年4月～2019年3月に実施予定の事業が対象になります。
募集期間は、2018年1月4日～1月26日（締切日必着）となります。

学術定期刊行物助成

学術定期刊行物助成は、日本に所在する人文社会科学分野の学会・研究会等が、韓国朝鮮に関する研究活動の成果報告として刊行する学術定期刊行物（一団体あたり一種一号）を支援対象とします。

対象・募集期間

2018年4月～2019年2月に出版完了予定の学術定期刊行物が対象になります。
募集期間は、2018年1月19日～1月26日（締切日必着）となります。

募集要項や応募書類フォームは当基金ホームページよりダウンロードできます。

この夏、日韓の学生は「思いやり」を実践し、世界に通用

韓国青年訪日団第3団に愛用の車いすとともに参加した金知佑（キム・ジウ、啓星高1年）さんの日本訪問様子と本人の感想、訪問受入に関わった人たちの感想をご紹介します。

7月 25日（火）　成田国際空港から入国、そなエリア東京、東京タワー

7月 26日（水）　特別講義「被災地の復興状況の理解」、浅草見学（浅草六区再開発地域、浅草寺）、文化体験（浴衣着付け）

浴衣に袖を通して浅草の街を散策して記念撮影

7月 27日（木）　学校交流3団：東京都立桜修館中等教育学校、4団：東京都立小石川中等教育学校を訪問、日本科学未来館

7月 28日（金）　熊本県へ移動、熊本県庁表敬訪問、熊本地震及び熊本に関するブリーフィング、熊本城及び県内被災地

7月 29日（土）　天草へ移動、イルカウォッチングや養殖真珠の取り出し体験
ホームステイ対面式

7月 30日（日）　ホームステイ、文化体験（茶道、華道、盆踊り、郷土料理作りなど）

文化体験を楽しむ韓国側団員たち

再会を誓うジウさん、訪日団員とホストファミリーの松川さんご夫婦

7月 31日（月）　学校交流3団：熊本県立牛深高等学校、4団：熊本県立天草高等学校
4団：崎津教会見学、長崎へ移動

学校訪問では、牛深高の生徒と一緒にたこ焼き作りも楽しみました

8月　1日（火）　長崎市内見学（長崎平和公園、長崎原爆資料館、大浦天主堂、グラバー園、稲佐山）

8月　2日（水）　佐賀県へ移動、陶山神社、佐賀県立名護屋城博物館・特別史跡名護屋城跡など見学、福岡県へ移動、成果報告会

8月　3日（木）　福岡国際空港より帰国

金 知佑（キム・ジウ）さん

旅というと、まず思い浮かぶのは「心配」という単語です。なぜなら、幼い頃事故によって車いすを使うようになり、行く先々で活動に制限を受けることが多かったからです。しかし、今回訪日団の一員として訪れた先では、ほとんど車いすのままで問題なく見学することができました。

10日間の日程では特にホームステイ先でのことが心に残っています。

ホームステイ先の松川さんのお宅に到着すると、家の中のいたるところに手すりが取り付けられているのを目にしました。ホストファミリーのお母さんが「私たちが足が悪いから必要なの」と言ってくれたのですが、後になって、すべて私のことを思って松川さんご夫婦が自ら取り付けてくれたことを知り、ありがたく思い、感動しました。

私は障がいがある人が、障がいを感じないことが福祉であると思います。今回の訪日プログラムで私は障がいを感じることなく、他の団員たちと同じようにいろいろな体験をすることができました。

訪日プログラムで経験したすべての事が、私自身をもう一歩更に広い世界へと導いてくれ、そこで出会った多くの人たちとのつながりができ、更に成長していけるものと思います。このような機会を与えて下さりとても感謝しています。

ホストファミリー（宮地岳里山民宿の会）：松川 とみ子さん

ホームステイを受け入れるにあたり、ジウさんが最低限どのようにしたら不自由なく過ごせるかが一番の課題でした。家では安全に過ごせるように手すりなどの準備をしました。実際に彼女と対面し、明るい笑顔と上手な日本語に安心しました。ホームステイ中は、一緒に食事の準備をしたり、学校生活や将来の夢などについても話してくれたりと、ジウさんを含めて一緒に泊まった子たちがとても明るく、皆さんから元気とパワーをもらいました。

3日間でしたが、ジウさんが自立して取り組む姿や語学も堪能でコミュニケーションをとる姿を見て、これからも健常者と変わりなく、何事にでもチャレンジして欲しいと思いました。きっと彼女ならできると思います。またそんなジウさんの姿から私たちも勇気と感動をもらいました。ありがとうございました。

熊本県立牛深高校1年次：畑中 美実さん

学校訪問ではジウさんの交流担当として一緒に過ごしました。私は韓国語も話せない上に、車いすについては、中学時代に看護体験で操作方法を少し習った程度だったので、ケガをさせないように、ジウさんにも気を遣わせることの無いようにと緊張していました。また、来校前には、学校内を車いすで移動する際に、安全で最適なルートはどこか、先生や先輩たちに何度も確認し、何よりも自分の不安と緊張が伝わらないように心掛けました。そして今も、ジウさんと互いにSNSでこまめに連絡を取り合い、交流を続けています。

熊本県立牛深高校2年次：猪股 彩夏さん

大きなお役に立つことはできなかったかもしれませんが、車いすでジウさんが移動するときには、段差のある場所で手を貸してあげたり、声をかけてあげたりしました。すると彼女が「ありがとう」と言ってくれたことがとても嬉しかったです。また、ジウさんに韓国の学校での生活の様子を聞いた時に、とても楽しそうに話してくれたことが今も印象に残っています。

する「おもてなし」とは何かを学びました

平昌オリンピック・パラリンピックで日本語通訳などのボランティアをする韓国の大学生たちが来日し、日本のおもてなしについて学びました。

8月　1日（火）　羽田国際空港から入国、東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会ブリーフィング

8月　2日（水）　特別講義「日本のおもてなしについて」など

8月　3日（木）　アイセック東京大学委員会の学生による企画（おもてなしに関する講演・体験実習、東京大学学生と日本のおもてなしに関する意見交換会）

星のや東京に勤務する、元リオ五輪競泳日本代表の山口美咲氏の講義のあと、アスリートたちの立場に立って接することが出来るよう、ロールプレイングによる接客講習を行いました

一日のプログラムを終え、おもてなしについて討論する訪日団員とアイセック東大委員会の学生たち

8月　4日（金）　北海道へ移動、北海道庁表敬訪問など

8月　5日（土）　小樽市民ガイドの案内で小樽運河周辺見学、ホームステイ対面式

8月　6日（日）　ホームステイ

8月　7日（月）　2017 冬季アジア札幌大会活動ボランティア経験者との意見交換会
札幌五輪関連施設視察（札幌オリンピックミュージアム、大倉山ジャンプ競技場）

本年2月の冬季アジア札幌大会で活動したボランティア経験者たちと大倉山ジャンプ競技場を見学

8月　8日（火）　旭山動物園、美瑛・富良野地区見学

8月　9日（水）　スキーメーカー（株式会社ハンクス）見学
成果報告会

スキー製作の現場を見学

8月 10日（木）　東京に戻り、羽田国際空港から帰国

韓国外国語大学校中国地域学科4年：白 周燕（ペク・ジュヨン）さん

「相手への思いやり」について、さらに深く考えるようになりました。韓国的なおもてなしだけでなく、海外の人たちには彼らの文化を理解し、彼らに合ったおもてなしをしなくてはと思うようになりました。

本番では、韓日通訳を担当しますが、双方のコミュニケーションが円滑に進むよう、しっかりと基本的な任務を果たし、言葉を訳すだけにとどまらず、海外から韓国に来てプレーに励む選手たちに不便の無いようにお手伝いしたいです。韓国人にとって当たり前のことも、海外から来た彼らにとっては、そうではない事もあるので、文化の違いから起こる不便さを減らしていくことも、私たちに求められていることだと思います。

韓国外国語大学校経営学科2年：朴 珍健（パク・ジンゴン）さん

東大の学生たちが企画した「おもてなし」を学ぶプログラムの中で、星のや東京での日本のおもてなし文化を体験できたことが、今でも印象に残っています。

今回の訪問を通じて、ボランティアとしてのあるべき姿勢を、日本のおもてなし文化から学び取ることが出来ました。ボランティアとは、相手に対価を求めずに純粋な気持ちで共に楽しむものだという事を学び、相手を思いやることの素晴らしさを知る事ができました。2月の本番では、訪日団で出会った日本の人たちの顔を思い出しながら、最善を尽くして、共に楽しみ、最高の思い出を作りたいと思います。

東京大学文学部英語英米文学科3年：瀬戸 多加志さん

韓国の学生におもてなしを体験してもらうための企画を立てる中で、自分たちが普段、学生生活を送っている大学内のことも、いざ説明しようとすると知らなかったことがたくさんあることに気づかされました。

日本の「おもてなし」は特殊なもので、海外の人たちには判りにくいものと思っていましたが、今回の経験を通して、相手を思いやる気持ちは世界共通であり、日本の「おもてなし」は形を少し変えるだけで、世界の人たちにも通用する物になると実感しました。

東京大学文学部フランス語圏文学科2年：真保 友加里さん

韓国の学生たちが日本の文化を実際に体験し、心から喜んでいる様子を目の当たりにできて嬉しかったです。今回の企画を通して、「おもてなし」とは、今までは漠然としていたものを、このプログラムを通じて実体験することで、「おもてなし」という概念を理解・説明することの難しさを感じたと同時に、日本人として持つべきおもてなしの形を改めて確認できるようになりました。

日韓文化交流基金事業報告

本号では、2017年度第2四半期（2017年7月1日から9月30日まで）の実施事業を紹介します。

1 青少年交流事業

訪日団

団体名	団　長	計	男	女	期　間	主な訪問先
韓国青年訪日団（第1団）	李志炯（イ・ジヒョン） 淑明女子大学校日本学科教授	36	11	25	7/19～7/28	神田外語大学 長崎県（長崎市、南島原市、佐世保市）、福岡県（福岡市）
韓国青年訪日団（第2団）	鄭魯澤（チョン・ノテク） 蔚山大学校造船海洋工学部副教授	36	13	23	7/19～7/28	目白大学 長崎県（長崎市、南島原市、佐世保市）、福岡県（福岡市）
韓国青年訪日団（第3団）	申敬蘭（シン・ギョンラン） 順天工業高等学校日本語教師	36	8	28	7/25～8/3	東京都立桜修館中等教育学校、熊本県立牛深高等学校 熊本県（熊本市、天草市、苓北町）、長崎県（長崎市）、 佐賀県（唐津市、有田町）、福岡県（福岡市）
韓国青年訪日団（第4団）	鄭燦英（チョン・チャンヨン） 井州高等学校日本語教師	35	9	26	7/25～8/3	東京都立小石川中等教育学校、熊本県立天草高等学校 熊本県（熊本市、天草市、苓北町）、長崎県（長崎市）、 佐賀県（唐津市、有田町）、福岡県（福岡市）
韓国平昌五輪ボランティア訪日団	朴玧美（パク・ユンミ） 平昌オリンピック・パラリンピック組織委員会国際部	21	3	18	8/1～8/10	東京大学、北海道（札幌市、小樽市、旭川市、富良野市、登別市、上川郡美瑛町）
韓国大学生訪日団（外務省招聘）	洪錫榮（ホン・ソクヨン） 韓国外交部文化交流協力課	30	17	13	9/20～9/29	法政大学、七飯町立大沼小学校、七飯町立軍川小学校、北海道（札幌市、函館市、亀田郡七飯町）
韓国青年訪日団（第5団）	徐東周（ソ・ドンジュ） ソウル大学校日本研究所	16	7	9	9/21～9/27	埼玉県（川越市、日高市）、青森県（青森市、三沢市、十和田市、弘前市）

韓国青年訪日団（第1団）日本遺産「日本磁器のふるさと肥前」内、三川内焼生産地域を三川内磁器工業協同組合の方と共に見学する様子

韓国青年訪日団（第2団）ホームステイの様子

韓国青年訪日団（第3団）熊本県立牛深高等学校にて部活体験をする様子

韓国青年訪日団（第5団）「日韓交流おまつり in Tokyo」ブース運営に参加しながら多くの日本の市民と交流している様子

韓国青年訪日団(第4団)市民ガイドと共に長崎原爆資料館を見学する様子

韓国平昌五輪ボランティア訪日団　2017冬季アジア札幌大会活動ボランティア経験者と交流している様子

韓国青年訪日団(外務省招聘)札幌オリンピックミュージアムを見学している様子

訪韓団

団体名	団　長	計	男	女	期　間	主な訪問先
日韓学術文化青少年交流事業訪韓団（第1団）	富井愛枝（とみい　やすえ） 大阪府豊中市立熊野田小学校	20	12	8	8/29～9/7	ソウルジャムヒョン小学校、東栢中学校、首都女子高等学校、ソウル特別市、慶尚北道(安東市、慶州市)、釜山広域市
日韓学術文化青少年交流事業訪韓団（第2団）	大井川英敏（おおいがわ　ひでとし） 福島県いわき市教育委員会	14	8	6	9/12～9/21	松北小学校、東栢中学校、郷一高等学校、ソウル特別市、京畿道（水原市）、慶尚北道（慶州市）、釜山広域市
日本大学生訪韓団（韓国外交部招聘）	余田幸夫（よでん　ゆきお） 外務省大臣官房総務課情報公開室	30	9	21	9/20～9/29	韓国外国語大学校、ソウル特別市、江原道(江陵市、平昌郡)、京畿道（坡州市）

日韓学術文化青少年交流事業訪韓団(第1団)ソウルジャムヒョン初等学校にて授業見学をしている様子

日韓学術文化青少年交流事業訪韓団(第2団)ホストファミリーとのお別れの際に一枚

日本大学生訪韓団(韓国外交部招聘)江陵コスタルクラスター内、競技場を見学している様子

朝鮮通信使関連資料 ユネスコ「世界の記憶」登録が正式に決定

広報誌前号（第83号）の特集でお伝えしました、朝鮮通信使関連資料の「世界の記憶」への登録につきまして、去る10月31日未明（日本時間）にユネスコは登録を正式に決定しました。当基金としましては、今回の登録まで日韓両国で関わられた団体及び関係者の皆様に心よりお祝い申し上げますとともに、朝鮮通信使の誠信交隣の精神を当基金活動にも活かして、これからも事業実施に務めてまいります。

青少年交流事業
フォローアップ

訪日団OB・OGインタビュー

「東日本大震災被災地について今も思うこと」

2014年12月、「訪日団でお世話になった、岩手県釜石市のボランティアガイドの方の連絡先を教えてもらえませんか」と一通のメールが届きました。メールの差出人は金庚玟（キム・ギョンミン）さん。彼女は2013年1月に実施された訪日団に参加した学生で、東日本大震災の被災地である岩手県を訪れました。震災の語り部から聞いた話や自身の目で被災地の様子に心動かされ、日本の防災教育に関心を持ち、2014年に京都大学に留学。その際に、改めて岩手県を訪れて被災者の方々にお話しを伺いたいという内容のメールでした。東日本大震災発生から7年が経とうとしている今も被災地のことを思い続けている彼女にお話を伺いました。

私は小学生の頃から、日本の音楽やドラマに興味を持ち、中学生、高校生の時にそれぞれ1週間程日本を訪れたことがありました。大学では日本語教育を専攻していて、2012年に在韓日本大使館で行われた大学生日本語演劇大会で入賞したことで、2013年1月の訪日プログラムに参加することになりました。

元々日本に対しては、親近感を持っていたのですが、訪日プログラムでの訪問先が東日本大震災の被災地であると知ってからは、当時の韓国では福島第一原発の事故による放射能問題に関する報道が取り上げられていたこともあり、日本を訪れることに多少の心配がありました。

岩手県三陸沿岸を中心に訪れた中で、今も印象に残っているのは、「釜石の奇跡」です。それは、津波による甚大な被害を受けながらも、津波を経験した両親や祖父母から伝え聞いていた話や防災訓練の成果もあり、釜石市内の小中学生の多くが救われたという話です。釜石の子どもたちが日ごろ学んだことを震災の中で確実に活かせたことに感心させられました。

帰国した私は、大学内で行われた日本語スピーチ大会で、「釜石の奇跡」や津波の恐ろしさ、現地で見聞きしたことや被災地への応援や関心を呼び掛ける内容を話しました。スピーチを聞いた友人たちは、これまで被災者の視点や復興という観点から話を聞いたことが無く、とても新鮮だったと感想を述べていました。またある友人は私の熱意を感じて、日本で防災について勉強することを勧めてくれました。

次第に日本における防災意識に関心を持つようになりました。例えば、地震発生からすぐに震源地や震度などの情報が放送されること、学校や町内会といった単位で行われる防災訓練、避難場所の表示など、日本人にとっては当たり前で日常の風景かもしれませんが、外国人の私にとっては全てが馴染みないものでした。

2014年に京都大学の日本語・日本文化研修プログラムで留学し、2015年私は再び岩手県を訪れました。

再び訪れた陸前高田の街は、2013年1月に初めて訪れた時と比べて格段に復興が進んでいるように感じることができました。釜石では震災の語り部としてボランティアガイドをしていた藤井節子さんに再会したり、陸前高田では市民の方にご協力いただき、防災意識に関するインタビューを行うことができました。被災地でいろいろなお話を聞くにつれ、命の大切さについても思い知らされました。また、地域のコミュニティが崩れ、それまでの生業が続けられず、先の見通せない現実に苦しむ人たちもいて支援が必要であるとも感じました。同時に韓国は地震や津波といった自然災害が少ないため、学校での防災訓練もあまり整っていない現状と今後についても考えるようになりました。

陸前高田市小友町矢の浦集落の防災訓練リーダーと一緒に、写真中央が金庚玟さん。

大学を卒業した今は、日本語教師を目指して勉強しています。今後は東日本大震災被災地の復興のために、これからも被災地を訪れ、復興の状況を確めたり、災害伝承についての研究にも取り組みたいと思います。災害を経験した方々のお話を少しでも多く記録に残すことはそれだけでも意味があるからと確信しているからです。

PROFILE

金庚玟（キム・ギョンミン）

1994年生まれ。訪日当時は祥明大学校日語教育科1年に在籍。現在は大学を卒業し、日本語教師を目指して勉強中。

表紙写真紹介

タイトル：「虹の架け橋」（作者：書道家　濱﨑道子）

2018年2月、大韓民国で開催の「第23回冬期平昌オリンピック」、誠におめでとうございます。「日韓交流まつり」の念いが、平昌オリンピックに繋がる事を願って「虹の架け橋」を揮毫致しました。